

教育学における分野融合研究の試論的考察

ー初任期教員のライフストーリー・インタビューを通してー

清水 良彦^{*1}・畑中 大路^{*2}・金子 研太^{*3}

【要 旨】 本研究は、初任期教員に対するライフストーリー・インタビューを手がかりとしながら、教育学における分野融合研究の可能性を明らかにすることを目的として行った。現在、教育学内部においても各専門分野に細分化される「たこつぼ化」(荻谷 2007)が指摘されており、専門分野を超えた分野融合研究が待たれている。そこで、本研究では中学校社会科教員の初任期(1年目・2年目)の教職経験に関するライフストーリー・インタビューを分析・考察し、教育学における分野融合研究の可能性を探ることを目的として行った。

その結果、「授業実践」、「多忙・多忙感」、「保護者との関係」という三つの視点とそれらと関係する諸要素を抽出することができた。これはレプロ(邦訳 2013)による「学際研究プロセスの10のステップ」のステップ2「学際的アプローチの利用を正当化する」こと、及びステップ3「関連する専門分野を特定する」ものとして位置付けることができよう。

【キーワード】 分野融合研究 ライフストーリー 初任期教員

I はじめに

1 問題意識

教育学において「家々のしつけがなされているかのごとく、それぞれに特有のジャーゴンが使われ、よるべき先行研究もわかれている」(荻谷 2007: 100)という問題点は、現在の研究者が取り組むべき課題の一つであろう。近年の業績主義は、研究課題の設定や発表様式、学問分野の関心の方向性などに影響を及ぼし、「同じ学会の中でも(読者が一著者注)せいぜい数十人にとどまるような、「専門的な論文」」(荻谷 2007: 102)が増加する傾向にあると指摘されている。

平成 28 年 5 月 24 日受理

*1 しみず・よしひこ 大分大学教育学部附属教育実践総合センター(教育方法学)

*2 はたなか・たいじ 長崎大学大学院教育学研究科

*3 かねこ・けんた 九州大学大学院人間環境学研究院(教育学部門)

では、荻谷が指摘する「たこつぼ化」の傾向とはいかなる状況か。この点について、本稿が対象とする初任期教員¹⁾を取りあげた先行研究をもとに確認したい。初任期教員を取りあげた研究は多数存在するが、かかる研究は大きく5つに整理できる。一つは、初任期教員が学校内外でどのような生活を送っているのか、エスノグラフィックにその特徴を描いたものである(一般財団法人日本私学教育研究所編 2011 など)。

二つは、教員研修の観点から初任期教員を捉えたものである。臧俐(2006)は、1989年から制度化された初任者研修について、当該政策が形成された経緯と受容過程を分析した。また、研修制度の観点から論考したものとして、戦前に実施された教員養成・研修を分析した研究や(佐藤 1999)、各自治体における研修体系の状況を調査した研究(加藤 2011)、初任期教員も参加して行われる校内研修の実際を示したもの(富山市立堀川小学校編 2009 など)等、多数存在する。研修内容に言及した上記研究からは、初任期教員に求められる資質力量の考察が可能である。

三つは、初任期教員の授業に着目した研究である。教師にはそれぞれ「授業スタイル」があるとされ(森脇 2007)、その基礎は初任期に形成されがちである。北田(2008)は初任期教員が授業と向き合う過程で生じる省察の存在を明らかにしたが、初任期教員の授業に着目した上記のような研究は、その後の「教師としての成長」への関連が深いといえる。

四つは、教師の授業以外の仕事に着目した研究である。例えば神村(2014)は、社会経済的格差の大きい学校に配属された初任期教員は、社会状況への意識が高まる傾向を明らかにした。当該研究のような授業以外の仕事を対象とした研究が示す知見も、その後の「教師の成長」と関連が深い。

そして五つは、教師のライフコースの視点から初任期教員の位置づけを捉えた研究である。山崎(2012)はライフコース研究を通じ、初任期教員が直面する「入職後のリアリティ・ショックの存在」と「先輩教師との出会いの重要性」を挙げている。上記のような研究は、マクロな視点から初任期教員を捉えようとした研究であると言える。

2 先行研究の課題・分野融合研究の可能性

以上、初任期教員を対象とした研究を取りあげ、その特徴を概観した。以下では先行研究に孕む課題を三点指摘したい。課題の一点目は、先行研究は初任期という短い期間のみを対象とするものが多い点である。当該研究の多くは、初任期为「教師生活の礎」として位置付けてはいるものの、その後の成長を詳細に捉えたものが少ない。

課題の二点目は、先行研究の知見は抽象的なものに留まるという点である。山崎(2012)のようなライフコース研究は上記一つ目の課題に応答するものといえるが、ライフコース研究は学術性を求め分析結果の一般化を志向する傾向が強く、例えば教師の「感情」(金川 2011)といった微細な現象を掴めていない。また最近では、教職経験年数ごとの特徴を追った研究も台頭しているが(脇本・町支 2015, 波多江・川上・妹尾 2016 など)、その方法論としては量的手法が主にとられるため、そこで生成される知見はライフコース研究と同様の課題を抱えている。

三点目は、研究で明らかにされた知見の融合が不十分な点である。前節で確認したように、初任期教員を対象とした研究は多くなされているが、先行研究の多くは、研究者・学会が関心を持つ観点から初任期教員を捉えるに留まり、それぞれの研究が明らかにした知見の相互作用

が示されていない。以上より、初任期教員を対象とする研究においても、荻谷が指摘する「たこつぼ化」が生じていると言える。

このような中で求められるのは、分野を超えた研究知の相互交流であり、成果創出までの時間軸にとらわれない研究であるといえるだろう。クラークは、『高等教育システム』において学者集団の分断現象と連動して、分断してしまった領域をつなぐ新たな役割が生み出されることを指摘した。そして、その役割は「専攻領域間を横切っている手続き的なアプローチとか実在的な観念」(クラーク 1994:117)を用いる「方法論者(メソドロジスト)」や「理論家(セオリスト)」に見出されている。すなわち、研究対象や研究手法を中軸に据えた知見の統合というアプローチの可能性に言及していると言えよう。

国内では、教育に関する政治分析を媒介とした分野融合を構想した村上(2013)のように、分野融合の必要性や可能性は散発的に指摘されるものの、それを実際に実現した研究は管見の限り存在しない。

その背景には、前述の荻谷(2007)が「たこつぼ化」の要因として指摘する日本の大学・研究者養成の構造的問題に加えて、学際研究の手法に通じた研究者が少ない点があると考えられる。

レプコ(2013)は、学際研究学会(Association for Interdisciplinary Studies)などの議論をもとに分野融合をともなう学際研究手法²⁾の考察を進め、「学際研究のステップ」(表1)として10段階にまとめている(レプコ 2013: 69)。

これら研究プロセスは、まず課題や関連領域を確定し(ステップ1~3)、各研究領域の理論や方法論のつながりを確認しながら(ステップ4~7)、共通の理論基盤や方法論を構築する(ステップ8)。そのうえで、得られた知見を用いてより包括的な理解や発展的な研究へとつなげる(ステップ9・10)ことによって構成されているといえる。ただし、これらのステップは直線的に進むものではなく、フィードバックループの中で行きつ戻りつしながら進むものである(レプコ 2013: 70)。

本研究では、次項以降に述べるライフストーリーによる分析を手掛かりとしながら、教育学における分野融合研究の可能性と課題を明らかにすることとしたい。なお、本稿はⅠ-3およびⅡ、Ⅲを第1筆者、Ⅰ-1第2段落から第6段落まで、Ⅰ-2第1段落から第3段落まで、Ⅳを第2筆者、Ⅰ-1第1段落およびⅠ-2第4段落から第8段落までを第3筆者が執筆した。

3 研究の方法・対象

本研究ではライフストーリー・インタビューを行う。ライフストーリーは、「個人のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的(ホリスティック)に読み解こうとする質的調査法」(桜井 2012: 6)の1つとされる。研究対象者のライフストーリーをもとに教職生活をホリスティックに分析する

表1 学際研究のステップ

1	課題を定義し、研究上の疑問を述べる
2	学際的アプローチの利用を正当化する
3	関連する専門分野を特定する
4	文献検索を行う
5	関連する各専門分野の適合性を高める
6	課題を分析し、各知見または理論を評価する
7	知見または理論の不一致とその源を特定する
8	概念や理論の間で共通基盤を作り出す
9	より包括的な理解を構築する
10	理解を再考してテストし、伝達する

ことで、教育学内部において細分化されている各分野のいずれかに限定されることなく、関連する複数の専門分野を特定しうると考えられる。

また、従来のライフストーリー研究では、およそ十年以上の一定期間を振り返ることが多い。例えば、高井良（2015）は、中年期を生きる高校教師に対して、中年期全体の振り返りのライフストーリーの事例研究を行い、教職アイデンティティの危機と再構築の過程で生じている経験に迫ろうとしている。これに対して本研究では、研究対象者に対して継時的・長期的なライフストーリー・インタビューを試みる。すなわち、本研究は1年毎の調査を長期的に積み重ねることで研究対象者とともに人生を“生きる”ことを試行するものである。

本研究では、古田円（仮名）のライフストーリーの語りを研究対象とする。古田円は1988年生まれの女性である。2011年3月に4年制一般大学であるX大学を卒業し、このとき中学校社会科の教員免許状を取得した。大学卒業後は出身地のA町役場で公務員として3年間勤務した。その後転職し、2014年4月よりA町に近接するB市の中学校社会科教員として教職に就いた。赴任したB市立C中学校は、都市部の住宅地にある1学年9クラスの大規模校である。古田は、2014年度は1学年担当、2015年度は2学年を担当している。事例選択の理由は、古田が教員養成系大学・学部卒業ではなく、かつ社会人経験を経て教職に就いたという特徴的なキャリアパスを辿っていること、筆者と年齢・出身地・卒業した大学などの背景が近く、ラポールが深いことの二点である。

古田円を対象として教職生活に関するライフストーリー・インタビューを2回行った。第一回調査は2014年8月8日に行い、1時間1分47秒の語りを得た。第二回調査は2015年8月7日に行い、59分44秒の語りを得た。半構造化インタビューの手法を採り、各回に共通する質問項目として、インタビュー実施の直近である1学期のエピソードで①一番驚いたこと、②一番大変だったこと、③一番嬉しかったことの3つを設定し、それぞれについて追加質問を行う形式で調査を行った。

Ⅱ 分析

古田円のライフストーリー・インタビューの音声データをもとに逐語的なトランスクリプトを作成し、定性的コーディングによってカテゴリーを抽出した。具体的な分析手順は、①古田円の語りをエピソードごとに区分する、②エピソードにカテゴリー名をつける、③同一エピソードに複数のカテゴリー名が付与できる場合は併記する、の3つである。一連の分析にあたっては、はじめに第一筆者がデータ全体の分析を行い、分析結果を共著者間で相互確認しカテゴリー名の確定を行った。以下、第一回調査及び第二回調査の分析結果を提示する。

1 第一回調査の分析結果

表2 第一回調査の分析

カテゴリー	語りの内容(一部)
初任者研修	週一で初任者の時間割が…。これ、私の今の時間割なんですけど、それプラス…。数字がクラスで、私4クラス行ってるんですね。社会は週3なので、 $3 \times 4 = 12$ と道徳・総合・学活をクラスで持つ分と、あとは「講」っていうのは、初任者なので講話を聴く時間っていうのがあって、拠点校の先生だったり、校長先や教頭先生が講話をされる時間なんですね。…〈略〉…
部活動指導	男子バレー部は、私が4月から持って、「3年生はすごくいい子たちですよ」って言われて。「生徒会役員が二人もいますし、もう安心ですよ」って言われ、何もわからず、いろいろなところに電話をかけて練習試合を組んでスケジュールを急いで出して、何とか練習試合とかに行くようになって、そして、大学生の講師が来てくれるって話になって、…〈略〉…
保護者との関係	小学校もだし中学校も。だって土日も結局、親は子どもを見なくていいんですよ。部活に行っとけば安心じゃないですか。で、放課後も7時とかまで部活してるから、で、そのあと塾でしょ。あんまり家庭でやらないといけなことがなくて、全部子守りが学校になってきているのかなあって。…〈略〉…
多忙・多忙感	もっとじっくり教材を作ったりとか、できると思ってたんですけど、もう自転車操業で明日、このクラス、一番進んでるクラスが明日あるから、ここまで作ってないってプリント作って、とにかく明日の授業を成り立たせるっていうくらいで、ほんとにストックがあればですね。…〈略〉…
校務分掌	多分、よく聞かれると思うんですけど、校務分掌が私生徒会なんですよ。生徒会って普通は、小規模だったら2人とか1人とかで見るんですけど、人数も多いので各学年2人ずつ担当で、私はベテランの先生と一緒に生徒会を持ってるので、今の所私なんにもしてないんですよ。生徒会に関しては。…〈略〉…
学校行事	5月の末なんですよ。5月25で、市内結構一緒にやるんですけど。何が大変って、その前2、3週間、5、6時間目が全て総合に変わるんですよ。で、総合って本当はそういう使い方しちゃいけないんですけど、学習指導要領にも書いてあるんですけど、まあまさにそういう使い方をして、…〈略〉…
授業実践	でも社会の授業は授業で、やりたいこともできてるので、私よく紙芝居とかを作るんですね。あの、絵は下手なんですけど。努力してることをちょっと、一生懸命さを伝えたいと思って、で、あと顔を上げさせたいので、教科書をあんまり使わずに自作のプリントと、だいたい紙芝居で導入とかするんですけど、あの、4択クイズとかそれするとちょっと考えさせることとか。…〈略〉…
同僚との関係	職員室とかの、先生同士のことで言ったら、私なんか、結構、一応可愛がってもらえて、もらって、もちろん厳しいことを言われることもあるし、でもそれは愛の鞭だと思ってらる。受けるんですけど。なんかこう、「ああ、よく見とうね」って言われたんですよ。生徒のこととかを。私、耳とか、結構耳がよくて…〈略〉…
生徒指導	うちのクラスで。「先生、この子は、もう、多分来れないと思います」って言われて。一学期皆勤賞だったんです。すごいんですよ、すごい頑張ったんですよ。その子がすごい頑張ったんですよ。本当に。で、その子が、夏休みに入ったので、ちょっと不安じゃないですか、長期休みに入って。二学期大丈夫かなって思ってた。この間、「今日、学校ちょっと来れる？」って。…〈略〉…

第一回調査の分析結果を表2に示している。第一回調査では9つのカテゴリーが得られた。まず、初任者研修に関して、授業担当や管理職講話、一般研修などの1週間の時間割に関する語りや指導教員との関係性や指導内容についての語りが得られた。次に、部活動指導についてはボランティアの外部講師(大学生)の練習参加をめぐるエピソードが詳細に語られた。また、保護者との関係については、入学式で初めて保護者と対面したこと、古田が顧問を務める男子バレーボール部の3年生保護者からの感謝の言葉をかけられたことなどが語られた。第一回調査において一番驚いたこととして語られたことは、「授業に時間を割けない」という多忙・多忙感であった。古田は日々の授業を「自転車操業」と表現し、授業準備は部活動指導が終わる午後8時から10時過ぎに及んでおり、入職前から教職の忙しさを理解していたものの「ここまでとは思わなかった」と語った。また、古田は一番大変だったこととして、学校行事(体育大

会)の指導を挙げた。体育大会までの2週間は体育中心の特別な時制がとられ、「授業をしているイメージ」であった中学校社会科教員の姿とのギャップが大きく、戸惑った様子が見られた。授業実践については、単元「アジア州」の終末において生徒たちの議論を引き出した授業について詳細に語られた。最後に、古田は一番嬉しかったこととして同僚との関係、生徒指導に関するエピソードを語った。同僚との関係では先輩教師に「一応可愛がってもらえて」という印象を語った。生徒指導については、小学校高学年時に不登校であった生徒が1学期の間「皆勤賞」であったエピソードが語られた。

2 第二回調査の分析結果

第二回調査の分析結果を表3に示している。なお、表3では第一回調査と重複して析出されたカテゴリーを網掛けで示している。第二回調査では8つのカテゴリーが得られた。まず、多忙・多忙感に関しては勤務校のクラス数が減ったことで教員数が5名程度減少し、1週間に授

表3 第二回調査の分析

カテゴリー	語りの内容(一部)
多忙・多忙感	ただ、今年に入るとそれが全くなくなって後輩も入ってくるので、その子達にはつくんですけど、私達には全く研修の先生はいらっしゃらないので、もう自分でやっていくしかなくてですね。ちょっと非常に四苦八苦しているんですけど。同時に教員の数が減って、去年は9クラス、9クラス、9クラス、プラス特別支援学級が2クラスあったので29クラス換算で…〈略〉…
部活動指導	あの、もちろん授業がない分、気持ちとしてはちょっと楽ではあるんですけど、部活がほぼ毎日あるんですけど、今日みたいに私が別の用事で出てる時とかに、つけないんですね。見るのができないから、休みにしたりだとか、もしくは他の先生にちょっと挨拶だけお願いしたりとかすることはあるんですけど、結局みっちりその場にいて見てないと、ほぼ無駄なんですよ。…〈略〉…
校務分掌	、ただ校務分掌が私は生徒会なんですけど、生徒会っていう分掌が実は一番きつくて、部活をもう1個持てるようなもって言われるくらいで。で、それがちょうど2学期に生徒会役員が新役員になるんですよね。で、2年生の担当の職員がその子たちを行事をつくったりとか一緒にしていくので、これからだと思ひます。これから中心になっていくんだと思ひます、2年生が。…〈略〉…
同僚との関係	同じで。大変ですね。結構うーん、大変なんですけど、その、元々いる人たち、去年から今の子たちを見てる人たちは、比較的まとまっているので。まあ、話やすいは話しやすいですけど。ただちょっと、50代の方々に、もう少し動いてもらえたらなと思ひつつ、ただ、そういう風に批判してばかりでもいけないなと思ひて、…〈略〉…
学級経営	今35人なんですけど、どう…。何…体育大会の時とかは、比較的、みんなまとまろうと、一つのことに頑張ろうとはしてて。大縄で、なんか、練習全部一位だったんですよ。ずーっと一位で。一位だけど、練習やめなくて、昼休みにいつも外で大縄の練習をして。で、してたんですけど、多分そのプレッシャーもあったし…〈略〉…
生徒指導	あ、でも、印象的だったのが一人、転校した子がいるんですけど。その転校していった子が、まあ、ちょっと学校に通えていない子だったんですよ。別に、だから転校させたわけではないんですけど。あの、本人が、夜遅くにというか、みんながいない時間に学校に来たりとかして、その時に話をしたりして。…〈略〉…
授業実践	また初めてなんですよ。で、今年は、去年4クラスだったんですよ。今年は6クラスで。6回同じことしたら、麻痺、わけわかんなくなつて。一回やったら、一回目は本当に、あ、これ言い忘れたとかいうのが出てくるんですよ。で、一番いいのはですね、3～4回目なんですよ。ベストコンディションは。…〈略〉…
保護者との関係	もう一つは暑中お見舞いじゃないですけど、このあいだはがきが来てて、保護者の方っていうか、まあ生徒もだったんですけど、クラスの子。お母さんが、通知表を見て、息子のことをよく見てくださってるんだなと思ひてうれしく思ひましたって書いてあつて。私あの、所見を1学期書いてたんですけど、去年からそうだったんですけど、成績って去年からここ(通知表の左側)で…〈略〉…

業を 22.5 コマ担当していること、1 日 1 コマの空き時間に生徒の宿題の点検や学級通信の作成などを行わなければならない、「ヒーヒー言っている」状況が語られた。次に、部活動指導については、夏休み期間中、古田が別の用事で指導につけない場合は生徒たちの練習が「ダラーっと」するため、部活動を休みにせざるを得ない日もあること、生徒たちにとっては部活動に休みがあるものの、古田にとっては休みが全くないことなどが語られた。第二回調査では、一番大変だったこととして古田は校務分掌を挙げた。古田は校務分掌として生徒会を担当している。第一回調査では「なんにもしていない」と語っていたが、今年度、古田は 2 年生の担当となり、生徒会役員が新しくなる 2 学期以降は 2 学年の担当教員が新生徒会役員とともに「行事を作ったり」していくため、「部活をもう 1 個持っているようなもの」と語るほど大変なものとして語られた。同僚との関係については、C 中学校に 3 人配属された 1 年目の初任教員との関係について、あるいは退職者や異動者が多く、半数以上が入れ替わりとなったことで職員室の雰囲気が「ギスギスした感じ」に変わったエピソードが語られた。学級経営については、体育大会では練習の成果が十分に出不せなかったものの合唱コンクールに向けて「まとまり」が出ているため、「結果としてよかった」エピソードとして語られていた。また、生徒指導に関しては、今年度から受け持つことになった不登校の生徒について、生徒本人、保護者と話し合いを重ね、本人のためにも転校をする判断をしたこと、転校後の生徒が学校に通えるようになったことが印象深いエピソードとして語られた。授業実践については、6 学級の授業を担当することになったため、6 回目には「自分が慣れて」しまうことや、「子どもたちのペースを考えていない」など「反省ばかり」であると語られた。また、2 学期の授業に向けて教材研究を進めているというエピソードも語られた。保護者との関係については、1 学期の通知表の所見に対して保護者から「よく見てくださってるんだな」という感謝の手紙が届いたエピソードが語られ、「死にそうになりながらも書いた甲斐があった」と振り返っていた。

Ⅲ 考察

2 回の調査で共通して析出された 7 つのカテゴリーのうち、他のカテゴリーと関連した語りが見られる「授業実践」「多忙・多忙感」「保護者との関係」の 3 つのカテゴリーに焦点を当て、考察を行いたい。

1 授業実践

まず、古田は、導入において具体物を教材として活用する授業について詳細に語っていることが分かった。以下に古田の語りを引用する。

でも社会の授業は授業で、やりたいこともできてるので、私よく紙芝居とかを作るんですよ。あの、絵は下手なんですけど。努力してるところをちょっと、一生懸命さを伝えたいと思って。で、あと顔を上げさせたいので、教科書をあんまり使わずに自作のプリントと、だいたい紙芝居で導入とかするんですけど、であの、4 択クイズとかそれするとちょっと考えさせることとか。…〈略〉…こないだチョコレートが値上がりするってなったときもチョコレートを持って行って、これね、小ちゃくなるとよとか言って。…〈略〉…みんなに関係があるんだよ

って、遠いことじゃないんだよねって話をしたりとかすると聞いてくれる、話をですね。ぐっとう、今日はよかったなあとか。(第一回調査)

第一回調査においては、授業において「紙芝居」や「チョコレート」を導入で活用しているエピソードが語られていた。古田がこうした授業方法を採る意図としては、「一生懸命さを伝えたい」という語りに見られるような、教師の授業に対する熱意が生徒に感じられるようにすること、あるいは「みんなに関係あるんだよ」という語りからもわかるように、生徒の生活に身近な教材を持ち込むことで、学習内容と生徒の生活が密接に関連していることを認識させるようにすることであると考えられる。古田はこのような具体物を教材として用いることで、生徒が「話を聞いてくれる」こと、そして古田自身が「今日はよかったなあ」と実感していると振り返った。

このような授業については、第二回調査においても語られている。

私結構、実物の教材とかを、去年も縄文クッキーとかを作ったんですけど、今年も、なんかこう、いろいろなんかこう、実物を回してみたりとか、食べる授業とか。今度やろうと思ってのものも、ちょっとあの、関東のどん兵衛と関西のどん兵衛で、味が違う、出汁が違うんですけど、…〈略〉…地域の区分、色々な分け方があったり、習慣が違ったりするよねっていう話を導入でしようかなって思っているんですけど。それは、忘れてはいけないなっていうか。結構アンケートとかとったら、覚えてくれているんですよ、そういうのを。だから、あのゲームが楽しかったとか。「先生、この間のあれしないますか」とか言われたら、あ、記憶に残る、なんていうか、残っているというか。サラって流しておけばいいやんみたいなのではなくて、ちゃんと、ふっと、留まったなっていうので。良かったのかなとは思います。…〈略〉…〈第二回調査〉

第二回調査においては、授業において「縄文クッキー」を実際に食べたエピソードやカップうどんを教材として用いるアイデアが語られた。このような具体物を用いた導入については「忘れてはいけないな」と語っており、古田が「授業スタイル」として重視していることが分かる。こうした授業について、第一回調査では生徒が「話を聞いてくれる」という意味づけを行っていたが、第二回調査においては授業アンケートの結果に基づき、生徒の「記憶に残る」、「サラって流して」しまうものではなく「留まる」ものとして意味づけ直されており、1年間の教職経験を経て、この「授業スタイル」がより強固に形成されつつある様子が見て取れる。

また、引用した語りの冒頭において古田は手応えのあった授業を説明する際に「なんかですね、それも人の開発した教材を使って、使わせてもらってやったんですよね。その時に、相当準備もしたし、まあ、大変ではあったんですけど、なんか、子どもたちには好評というか、楽しかったっていうのはありましたね。」と表現しており、生徒からの評価も高く、生徒が楽しんだ授業であったにもかかわらず、その詳細については語っていない。この語りからは、古田が自分で教材を開発したいという「こだわり」を持ち始めていることが示唆される。

以上のように、古田の授業実践に関する語りからは、導入において具体物を教材として活用する「授業スタイル」の形成が見て取れた。また、教職経験を積む中で自分で教材開発を行うという「こだわり」を持ち始めている様子も見られた。

2 多忙・多忙感

「多忙・多忙感」に関する語りは、第一回・第二回調査に共通して見られた。

第一回調査においては、古田は「多忙・多忙感」は「初任者研修」と関連付けて語っている。

週一で初任者の時間割が。…〈略〉…「初」って書いてある授業が、これが一番曲者なんですけど、水曜日の1時間目に私が1年2組で授業をするんですよ。(調査者: あっ, 担任クラス。)担任のクラスで。そこで、その指導案を、略案を毎回作って、これを教頭先生・校長先生、他の先生方に配って、参観に来てもらって、次の時間はその振り返りとかですね。だからこの水曜日ってのが、この指導案を作らないといけないがために、火曜日の夜だいたい帰れない。毎日毎日、1日1日を乗り切っている感じなので、火曜日の夜これを急いで作って…。他のクラスでもここの授業をしてれば楽なんですけど。その日に授業をするって感じですね。毎週ですね。(第一回調査)

初任者研修の一環として管理職による授業見学・授業検討が週に一度行われており、学習指導案作成などの準備のため、その前日は帰宅が遅くなるという多忙の現状が語られた。また、「毎日毎日、1日1日を乗り切っている感じ」という多忙感が語られている。

さらに、「学校行事」についても体育大会の準備のために「多忙・多忙感」が増していく様子が語られた。

で、何が大変って、昼休みに帰りの会までしたあとにブロックのその練習をするわけですよ。…〈略〉…何がきついかって、私たちの昼休みもないんですよ。…〈略〉…それを5、6時間目終わったらそのあとは、私は生徒会担当なので、会議があって。気づいたらもう、こんな時間。そのまま部活にも入るしですね。それが2週間続いたときに本当に、なんなんだろうみたいな。体育の先生じゃないのにずっとグラウンドにいるみたいな感じで。全然社会の先生っていう感じじゃないし。(第一回調査)

ここからは、「学校行事」(体育大会)に向けて、午後の練習見学や会議、部活動指導のために時間が割かれている状況が読み取れる。また、「全然社会の先生っていう感じじゃないし」という言葉からも、古田の社会科教員のイメージとギャップを感じていることが分かる。

一方、第二回調査では勤務校のクラス数減少に伴う教員の減員、異動・退職による教員の入れ替えによって「多忙・多忙感」が生じている様子が見られた。

国語と理科と数学とか主要5教科の先生が来なくて、かなり困った状態になって、授業数がみんなキツキツになってしまった。私が今授業が3時間、週3時間なんですよ。2年生は、社会科が。かける6クラス行ってるので今18コマプラス総合、道徳、学活と生徒会っていう校務分掌があるので、私が生徒会で、確か全部合わせたら23、22とか22.5とかそういう換算になるらしいんですよ。で、結構ヒュー言ってます。1日1コマしか空きがないので、その間に生活ノートを見て、いろいろ書類とかを作ったりとか学級通信作ったりとかそういうのを、その時間でも職員室に戻って来るともないくらいの、そんなバタバタで。…〈略〉…〈第

二回調査)

ここではまず、授業担当が6クラスに増えたことで、1週間に22コマ以上の授業を担当しており、「ヒーヒー言っている」という現状が語られた。この状況は同僚教員も同様であり、業務の多忙化により職員室の雰囲気が「暗い」、「ギスギスした感じ」という印象で語られ、「多忙・多忙感」が「同僚との関係」に影響を与えていることが示唆される。

また、第二回調査では「校務分掌」に関する語りに変化が見られている。古田は教職1年目から校務分掌として「生徒会」を担当している。第一回調査では初任ということもあり、「今の所私なんにもしてないんですよ」と話していたが、第二回調査では担当学年である2年生が中心となって生徒会活動を進めていくため、2学期の生徒会役員選挙のあとは来年度の夏頃までは「一緒に学校を動かすっていう役目」を担うという見通しを語り、校務分掌の中で「一番きつい」ものとして語られている。

以上のように、「多忙・多忙感」というカテゴリーの内容は、(初任者)研修や学校行事などの多岐にわたると同時に、その内容も年次を経て変化しており、さらにそこには「クラス数減による教員の減員」等の社会的・制度的要因がかかわっていることが読み取れる。

3 保護者との関係

「保護者との関係」に関する語りは配慮を要する子どもに対する「生徒指導」のエピソードと結びつきながら語られている。

まず、第一回調査においては不登校の傾向のある生徒について、「不登校の子は、5・6年、5年の途中から6年生、全然行っていない子がいて。(調査者：それ、古田さんのクラスで。)うちのクラスで。先生、この子は、もう、多分来れないと思います」って言われてて。一学期皆勤賞だったんです。(調査者：それすごい。)すごいんですよ、すごい頑張ったんですよ。その子がすごい頑張ったんですよ。本当に。…〈略〉…〈第一回調査〉と語っている。古田は、生徒が2学期以降も登校しやすいよう、夏休みにも生徒と個別に話すなどの配慮をしており、その際のエピソードが詳細に語られている。さらに、その生徒の「保護者との関係」について、以下のような語りが見られた。

その子が学校に一日も休まずに来たのがまず嬉しいのと。通知表と一緒に、一学期皆勤賞を渡して。それはお母さんに見せてほしかったんですよ。お母さんが相当辛い思いしてるので。不登校になるんじゃないかっていう気持ちとかがあるので、皆勤賞はお母さんへの皆勤賞でもあるんですけど、そのために前の日に、皆勤賞。「あ、そうだ皆勤賞あげたいな」って思っ、その前の日、終業式の前の日に、もう帰りたいと思いながら、もう、作って。…〈略〉…〈第一回調査〉

ここでは、保護者の思いに心を寄せ、本来1年間を通しての無遅刻無欠席を表彰する「皆勤賞」を、1学期間の「皆勤賞」として贈ったエピソードが語られている。第一回調査においてはこのほかにも、部活動指導をする3年生の保護者が部活動引退後に感謝の言葉をかけてもらったエピソードについても語られている。

一方、第二回調査においても不登校の生徒とその保護者との関わりが語られている。この生

徒はクラス替えを期に古田が受け持つことになった生徒で、生徒本人や保護者と話し合いを重ねた上で、「転校したほうが、本人のためになるという判断で」1学期中に転校した生徒である。

気にはなっていたんですけど、お母さんとかに連絡取らなかったんですね。そしたらこの間電話がかかってきて。実は学校に行ってますと。…〈略〉…あの時は、しっかり話をして、本当に転校をしたくないぐらい、〇中に通いたって本人も言っていたんですけど、でもやっぱり、今の状況がすごく本人も楽しそうにしてるし、いきいきとしています。ありがとうございますっていうことで連絡を頂いて。なんか、よかったなというか、なんか、すーっと落ちたというか、私の中で。〈第二回調査〉

ここでは、転校後に生徒が学校に通っているという連絡が保護者からあったことが語られ、それによって「すーっと落ちた」経験として認識されている。さらに、古田は「転校していった子のお母さんから電話があったときは、もうなんていうんですかね、叫びましたね。本当に。…〈略〉…で、1学期はクラス全体の大縄のことも吹っ飛ぶくらい嬉しかったですね」(第二回調査)と語っており、「学級経営」で語られた体育大会のエピソードと関連づけながらも、それ以上に充実感のあったものとして意味づけている。

以上のように、「保護者との関係」というカテゴリーは「生徒指導」(あるいは「部活動」)や学級経営における生徒に対する指導を通して語られていることがわかった。教職2年目の古田にとって、自分の指導の手応えを感じるエピソードとして捉えられていると推察される。

IV まとめと課題

本稿では、教育学における分野融合研究の可能性を探るべく、古田氏への調査をもとに試行的な検討を試みた。その結果、古田氏の語りから「授業実践」、「多忙・多忙感」、「保護者との関係」という三つの視点を抽出できた。この三つの視点はそれぞれ、研修や部活動、生徒指導や学級経営等といった様々な事項と複雑に絡み合いながら存在しており、また、そこには教職経験(キャリア)や社会・制度的要因も関係していることが明らかとなった³⁾。

上記三つの視点はこれまで、教育方法学や教育社会学、教育経営学等の各領域において個別に議論されてきたものであるが、本稿の分析結果を踏まえるならば、単一領域での議論で収束することは不可能である。すなわち、個々の領域を超えた知見の相互作用を検討する必要があるのではなかろうか。これは、本稿冒頭で述べたレプロによる学際研究のステップの2「学際的アプローチの利用を正当化する」こと、及びステップ3「関連する専門分野を特定する」ものとして位置づけることができよう。

今後は本稿で抽出した三つの視点を中心に調査を継続するとともに、上記視点に関する文献検索(ステップ4)を行い、より深く教育学における分野融合研究の可能性を考究していきたい。

注

- 1) 本稿が指す「初任期教員」は、教職入職後から5年前後の教員を指す。類似の用語としては、「新任教員」,「初任者」,「若手教員」など多数あるが、上記区分に含まれるものはすべて同じ対象を指すものとして取り扱う。
- 2) レプコ(2013)によれば、学際研究は複数の知見がより包括的な理解を構築するために統合される点で、複数分野の知見を並列させるだけの「多専門的研究」や、専門分野を超越した知識の総合体系を創出しようとする「専門横断研究」とは区別されている(レプコ 2013:18)。本稿で試みた分野融合は、専門分野の下位領域間の再統合にとどまるものの、知見の統合という性質は同様であり、また将来的に他の領域や専門分野を取り込んだ研究の展開可能性が開かれることから、学際研究の手法を援用することに意味があると考えられる。
- 3) 今回分析対象とした調査結果には、②「多忙・多忙感」が①「授業実践」に影響を与えると推測される語りも存在した。「もっとじっくり教材を作ったりとか、できると思ってたんですけど、もう自転車操業で。…〈略〉…とにかく明日の授業を成り立たせるっていうくらいで。ほんとにストックがあればですね。ネタとかあればそれでよかったんですけど。そこに取りかかれるのが8時からなんですよ。部活終わってから。8時からそれをしだすと、まあ、気づいたら10時とか、10時過ぎてて。でも私だけじゃないんですよ、残ってるの。…〈略〉…そこはちょっとびっくりしましたね。先生ってもっと授業をしないといけないのと思って。」〈第一回調査〉 今後はこのような観点から分析を行う必要がある。

参考文献

- 1) バートン・クラーク著、有本章訳(1994)『高等教育システム—大学組織の比較社会学—』東信堂。
- 2) 波多江俊介・川上泰彦・妹尾渉(2016)「初任期教員のストレスと適応感—パネルデータを用いた分析—」『日本教育経営学会紀要』58, pp.50-64。
- 3) 一般財団法人日本私学教育研究所編(2011)『教師生活 24 時間 初任者におくる教師の心得』日本教育新聞社。
- 4) 加藤久佳(2011)「都道府県並びに政令指定都市における教員研修体系に関する考察」『国立教育政策研究所紀要』140, pp.223-235。
- 5) 神村早織(2014)「校区の社会経済的格差と教師の役割認識」『教育社会学研究』94, pp.237-2
- 6) 金川舞貴子(2011)「学校組織と教職員の感情」『日本教育経営学会紀要』53, pp.159-165。
- 7) 荻谷剛彦(2007)「教育の社会科学的研究の<失敗>」『日本教育行政学会年報』33, pp.100-110。
- 8) 北田佳子(2008)「校内授業研究会における新任教師の学習過程—「認知的徒弟制」の概念を手がかりに—」『教育方法学研究』33, pp.37-48。
- 9) 森脇健夫(2007)「教師の力量としての授業スタイルとその形成」グループ・ディダクティカ『学びのための教師論』勁草書房, pp.167-192。
- 10) 村上祐介(2013)「教育政治学の枠組みと学際的融合の在り方(ラウンドテーブル 7「教育政治学の可能性を探る」)」『日本教育学会第 72 回大会発表要旨集録』p.85。
- 11) アレン・F・レプコ著、光藤宏之、大沼夏子、阿部宏美、金子研太、石川勝彦訳(2013)『学際研究—プロセスと理論—』九州大学出版会。
- 12) 桜井厚(2012)『ライフストーリー論』弘文堂。
- 13) 佐藤幹男(1999)『近代日本教員現職研修史研究』風間書房。
- 14) 高井良健一(2015)『教師のライフストーリー 高校教師の中年期の危機と再生』勁草書房。
- 15) 富山市立堀川小学校(2009)『子どもが自分を生きる授業—自己変革を促す校内研修』明治図

書出版。

- 1 6) 脇本健弘・町支大祐著, 中原淳監修(2015)『教師の学びを科学する データから見える若手の育成と熟達のモデル』北大路書房。
- 1 7) 山崎準二(2012)『教師の発達と力量形成—統一・教師のライフコース研究』創風社。
- 1 8) 臧俐(2006)『初任者研修政策の形成過程と展開過程に関する実証的研究—国会議事録・自治体施策資料・政策文書の分析を中心に—』東京学芸大学博士論文。

An Attempt at an Interdisciplinary Research Method in Pedagogy

—Based on Life-Story Interviews with a Newly Adopted Teacher —

SHIMIZU, Y., HATANAKA, T. and KANEKO, K.

Abstract

This study aims to clarify the possibility of an interdisciplinary research method in pedagogy referring to life-story interviews with a newly adopted teacher. Recently, interdisciplinary research has become increasingly necessary because of the tendency, as has been pointed out, for the field of pedagogy to be split into specialized parts (Kariya 2007). Therefore, we conducted the life-story interviews twice in the first two years about her teaching experience with a newly adopted teacher who teaches social studies in junior high school, and analyzed her life story referring to the "10 STEPS in the interdisciplinary research process" advocated by Repko (2013).

As a result, three viewpoints emerged focusing on the related elements: "teaching practice", "a hectic life and a feeling of being too busy" and "the relationship with the parents". We will continue to conduct interviews with the teacher, and consider how insights concerning these three viewpoints, that have been discussed separately in each area, may interact beyond each field.

【Key words】 interdisciplinary research method, life-story, newly adopted teacher